

佐久間徹の応用行動分析とユーティライゼーション： ミルトン・H・エリクソンとの類似点

石原 辰男

Key-word： 応用行動分析，ユーティライゼーション，佐久間徹，ミルトン・H・エリクソン

1 はじめに

心理臨床について，筆者は学部の3回生後半から大学院修士取得に至るまで佐久間徹⁽¹⁾の指導を受けた。筆者の出身大学では当時心理学科に臨床のコースはなく，教育学科に臨床心理学を専門とする教員がいた。制度上「転科」というものがあつたが，実際は転科先の学科が募集しなければ，学生の方から希望して転科することはできなかった。そのため，筆者はさしあたり基礎心理学の指導を受けるよりほか仕方なかった。本格的に専門教育が始まる3回生のとき，佐久間は「心理学講読」を担当する非常勤講師であつた。彼がテキストに選んだのは“Behavior Analysis of Child Development” (Bijou and Baer, 1978)であつた。子どもの発達を行動分析的に理解するという内容だった。この本を読み進めると並行して，筆者は当時すでにかなり注目されていた認知心理学をゼミのテーマとして学んでいた。行動分析では，心すなわち心的過程のモデルを構築するという手法をとらないが，その逆に認知心理学は情報処理システムとして心的過程のモデルを構築し，実験的に検証するものであつた。認知心理学はかなり細分化され，知覚，記憶，言語，思考といった心的機能の各領域にわたって心的モデルが提案され，実証研究がなされていた (Matlin, 1983)。心的過程

のモデルに関する考え方について，全く逆のアプローチを当時の筆者は学んでいたのである。検証されるべきモデルが心的機能ごとに多く提案されており，その数に圧倒された筆者は，心的構成概念を極端なまでに拒否しようとする行動分析の姿勢に潔さを感じ，心理学講読の授業の合間にさしはさまれる佐久間の臨床実践の話にも魅了された。さらに，心理学科の学生で卒業論文を佐久間の指導のもとで書いていた人がいることを知り，筆者は臨床に関連した内容で彼の指導を仰げないかを佐久間本人に相談した。彼は私の申し出に好意的に応じ，筆者の指導教授の了解も得て，佐久間のもとで卒業論文を書くことになった。これ以降，卒業研究のデータ収集と並行して，佐久間の臨床現場についてまわって指導を受けることになった。まだ，臨床心理士の資格もできていない頃のことである。

就職して心理臨床の道を歩むことになってからも佐久間から公私にわたる指導と支援を受けたが，2022年11月12日に逝去された。筆者のこれまでの心理臨床のありようを振り返る上で，佐久間の心理臨床実践が最も影響を与えたことはまちがいない。そのような影響を概念化することも心理臨床実践の研究テーマとなり得ると考えて小論を書くことにした。

筆者は当初応用行動分析の視点から心理臨床実践に取り組んでいた。最近ではブリーフセラピーの「祖として語られることの多い」

(吉川, 2020) ミルトン・H・エリクソンの影響をかなり受け、特に「ユーティライゼーション⁽²⁾」をテーマにした研究や実践に取り組んでいる(石原, 2020, 石原, 2021)。ユーティライゼーションとは、エリクソンの心理臨床実践の特徴の一つであり、症状であれ抵抗であれ、クライアントのモチこんだものは何であっても治療的に活用することを意味する(Erickson&Rossi, 1981)。例えば、エリクソンには以下のような事例がある。彼の元に連れてこられた夜尿症の少年ジェリーは、叫んだり金切り声をあげたりして抵抗した。「さて、叫んでいても、いつか息を切らすものです。私はその場で根気よく待ちました。そしてジェリーがちょっと休んで、深く息を吸った時、私は金切り声をあげました。彼は驚いたようでした。私は言いました。『私の番でしたよ、今度の君の番だ』それで彼はまた金切り声をあげました。彼がちょっと休んで息をつぐと私の番で、私は金切り声をあげました。私と彼は順番に金切り声をあげ、最後に私は言いました。『さあ今度は私が椅子に座る番だ』そして次は彼の番で別の椅子に座りました」(Zeig, 1980)。この事例では少年の抵抗のための金切り声を活用して、関係をつくり、「順番の交代」というルール意識に訴えて、治療面接への導入をはかったのである。このようにエリクソンは各々の事例の状況に応じて患者の持ち込んだ様々な事象を治療的に活用した。

筆者の知る佐久間の心理臨床実践は実験心理学を源流にもつ応用行動分析に立脚しながらも柔軟性に富んだユニークなものであった。その実践の柔軟性は、彼がユーティライゼーションに開かれていたことによるものではないかと筆者は考えている。そこで小論においてはまずユーティライゼーションの視点から佐久間の臨床実践を捉え直し、その実践が応用行動分析に基礎づけられながらも、ユーティライゼーションアプローチが用いられて

いた側面もあったことを示したいと思う。そしてその上で、佐久間とエリクソンの類似点について整理して考察を加えたいと思う。オリエンテーションの異なる優れた臨床家の類似点を確認することは心理療法の共通要因(Rosenzweig, 1936)を検討する上で意義があると考えられるからである。

2 ユーティライゼーションからみた佐久間の心理臨床実践

(1) フリーオペラント法

フリーオペラント法とは、発達障害児の言語獲得支援及びその支援に伴う問題行動の改善のために用いられる行動論的技法である。久野・桑田(1988)は、「先行刺激、反応、後続刺激の三項のうち、先行刺激による制御を最小にして、結果操作を最大にするオペラント強化技法」と定義づけている。フリーオペラント法には、「兵庫医大方式フリー・オペラント技法」(久野・桑田, 1988)や「HIROCo法」(大野・杉山・谷・武藤・中矢・園山・福井, 1985)と呼ばれるいくつかのタイプがあり、各々考え方や技法の細部において異なる点があるが(嶋崎, 1990)、ここでは佐久間の方法に絞った解説をしておく。

フリーオペラント法の原形は、障害児Mちゃんに対する佐久間の訪問セッションにおける以下のような経験から生まれたものだった。「雨あがりの近所の公園を、小柄なMちゃんをおんぶして散歩していた。水たまりをヒョイと跳んだ時、背中で『クックッ』という声を聞いた。跳んだのが面白かったようだ。すぐに思いついて、どんな声であれ、声帯から音が出るのを待って、その都度ピョンと跳んでみた。次第に発声の間隔が短くなり、三十分ほどで大きな声が頻繁に出るようになった。毎週日曜日の訪問セッションだったが、発声頻度が充分高くなると、まず私が声を出して彼女がそれに合わせた発声を

したらピョンと跳ぶという手続きに変更した。次第に私の声を忠実に模倣するまでになった。ここまで毎週日曜日、数ヶ月を要した。さて、どのようにして発声に意味を形成していくかをいろいろ思案していると、家庭で「ゴハン」「バイバイ」「ネンネ」などの発話が出だしたという報告を受けた」（佐久間, 2013, p.66）。この後、類似ケースでこの手続きは繰り返され、「発声模倣を活発にしさえすれば、ことばの獲得が始まる」ことに気づいたとしている（佐久間, 2013, p.67）。

水たまりを避けてジャンプするという何でもない行為の結果、Mちゃんから笑い声が出た。Mちゃんをただ喜ばせたいだけならば、むやみにピョンピョン跳んでみるだけで終わってしまったかもしれない。しかし、佐久間はその偶発的出来事からMちゃんが声を出したことの結果としてジャンプを試みたのである。つまり、Mちゃんの発声がオペラント反応であるとの仮説が生まれ、その検証として発声にジャンプを随伴させるという操作につながったのである。発声が頻繁に出るようになったことで、その発声がオペラント反応であることが確信された。

前述の久野・桑田（1988）の定義にみられる「先行刺激による制御」というのは、例えば発声という反応に対してであれば「あーあーと言ってごらん」というような言葉かけが考えられる。このような言葉かけをしても、模倣が未発達な子どもには無視されるかもしれないし、エコラリアの傾向が強い自閉スペクトラム症児なら「あーあーと言ってごらん」とそのまま繰り返されてしまうかもしれない。たとえ、うまくそのような言葉かけにしたがって「あーあー」と言えるようになったとしても、般化の困難な自閉スペクトラム症児では、学習した発声が大人の言葉かけがあるときにだけ出るという状況を生みやすい。あるいは、喉から声を絞りだすようなきつい発話になることもあるという（石原・佐久間,

2015）。そのような理由で、むしろ自発的に生じた発声に対する結果をどうするかが重要であるという視点がフリーオペラント法の核心である。そして、発声の結果生じた出来事はどのような条件であれば、発声を増やす効果をもつのかということも同時に検討された問題である。

その検討の結果として佐久間は、アタッチメント（愛着関係）の形成を妨げるような関わりを可能な限り避け、赤ちゃん扱いで十分な甘えを経験させることによって大人（養育者あるいはセラピスト）の関わりや応答が子どもの反応を高める効果をもつ条件となり、そして子どもが「自分は受容されている、共感されている」と感じて活動や模倣のモチベーションを高めるのに、大人が子どもの行為や発声を忠実に模倣すること（逆模倣）が効果をもつという考えに至った（佐久間, 2013, p.73-75）。

アタッチメント重視の考えは、大人（養育者あるいはセラピスト）が子どもの反応を高める関わり手となり、コミュニケーションのモチベーションとして子どもの側の要求や要望が増えることを意図したものである。また、佐久間自身が子どもの強い対人回避傾向を改善するのに動物行動学者ニコ・ティンバーゲンらの方法に酷似したやり方を用いていたこと（佐久間, 2013, p.71-72; Tinbergen & Tinbergen, 1972）に支えられていると思われる。従来の応用行動分析では、反応を高める可能性のある結果事象について、「過去に何によって動機づけられたか」「欲しがっていても手に入りにくいものは何か」「それを手に入れるために行動する価値があるか」等々の視点から選択するという考え方がなされているが（Albert & Troutman, 1999）、佐久間の場合はむしろ反応を高めることを可能にする条件を検討して、その条件の構築が可能かという視点⁽³⁾に立っていたという点が異なっている。

このようなフリーオペラント法による関わりによって、スムーズに意味のある単語の獲得につながる事例もあるが、柔軟で多くのバリエーションを含んだ音声のコントロールが遅々として育ちにくい事例を経験するようになる。このような事例に対して、佐久間は「喃語レベルでの大きな声」を出すことが改善を早める方法であることを見出す。つまり、子どもの自発的な発声のうち、比較的大きな声を出した時は関わり手も大げさな応答をして、そうでない時にはごく普通に応答するというような分化した対応をとることが提案されている（佐久間，1988，2013，p.113-114）。また、このような音声コントロールの発達が難しい事例では、「マ」や「ネ」のような単音が有意味化しやすくなる（例えば、「マ」が“ママ”，「ネ」が“ネコ”の意味をもつ）ことに気づき、それらを「ワン・サウンド・センテンス」と呼び、文脈的に対応するときは積極的に応答するという方法も提案されている（佐久間，1988，2013，p.114）。

佐久間のフリーオペラント法は、子どもとの関わりの中で生じた偶発的な経験と対人回避傾向の強い子どもに対する自らの関わり方が活用されて、コミュニケーションに障害がある子どもたちへの具体的方法として構築された。そして、フリーオペラント法によって生じた子どもの変化に応じて、その反応を活用しながらもより発達水準を高めるべく、対応を工夫していった。目の前の子どもの反応を観察して、その中の活かせる点を見極めて対応したという点において、ユーティライゼーションの原則が適用されており、従来の応用行動分析において指導の標的行動を指導者があらかじめ決めておくのとはかなり異なっている。以下の彼の言葉はそれを象徴している。「これまで、無言語の自閉症児にどのようにしてことばを教えたらいいのか、ともっぱら教え方を考えてきた。しかし、ことばの複雑さを考えたらとても教えられるもの

ではない、子どもが持っているはずの言語獲得能力を何なりと駆動させればいいのだと考えるようになった。言い換えれば、教えることを放棄したのである」（佐久間，2013，p.67-68）。

(2) 反応強度分化強化法

反応強度分化強化法については、前述した「喃語レベルでの大きな声」を高める技法、すなわち大きな声には大げさに応答し、小さな声には普通に応答するというのがその一例である（佐久間，1988，2013，p.113-114）。その他、子どもが自分の思い通りにしたいがために生じる他害行為には、その行為の強度が強い時には子どもの思い通りにするタイミングを遅らせ、弱い時に即座に認めてあげるという対応がある（佐久間，2013，p.120-121）。また、人への関わりが他害行為の形式をとることもあり、これに対しては、他害行為が強いときはひかえめに、弱いときに大げさに反応する。その後、自発的模倣行動をより活発にして人への働きかけのモデル提示で適切な行動の習得を進めるという対応が提案されている（佐久間，2013，p.127-128）。さらに、パニックと称する泣き叫びについて、興奮状態が波パターンをとることに着目し、波の上昇期、頂上期はしばらく手を出さずに待ち、ピークをやり過ぎて下降期にさしかかったら慰めの介入や大幅に妥協して可能な限り要求に応じてやるという対応が提案されている（佐久間，2013，p.132-133）。

いずれも子どもの反応を慎重に丁寧に観察して、その強さと弱さを見極め、そのうちの弱い反応に焦点をあて対応を変えようという視点はユーティライゼーションの原則として見ることができると思われる。

(3) その他のエピソード

その他のエピソードとして、排泄指導に関すること、クライアントへの説明に用いる言

葉の使い方及び筆者自身が目の当たりにした佐久間のデモンストレーションの例を取り上げておきたい。

(a) 排泄指導に関すること

言語獲得の促進は精神発達への影響という点で優先されるのに比べて、排泄の指導は佐久間にとってその優先順位は決して高いものではない。それでも、「おしっこトラブルは自分の意志に無関係なところで生じ、恥ずかしいことなので、自己劣弱感、自信喪失感に陥り、精神発達に歪みをもたらす。そうした場合には、指導の優先順位は高くなる」と述べている（佐久間, 2013, p.144-145）。それゆえ、かなり具体的な解決策に関する実績が積み重ねられている。その中でユーティライゼーションの視点から特徴的と思われる実践は「穴あきオムツ作戦」である。「紙オムツの中におしっこ、大便の習慣ができてしまい、なかなか修正が難しい場合には、穴あきオムツ作戦を採用する。紙オムツのままで便器に座り、おしっこ、うんちを紙おむつの中でするということを繰り返す。頃合いを見計らって、オムツに小さな穴を開けて、本人は紙おむつの中のつもり、出したら便器へ落ちるという具合にする。暫時、穴を大きくしていく」というものである（佐久間, 2013, p.151）。オムツをしているという刺激状況が条件刺激となっているという理解であるが、それはそれで受け容れて、オムツに穴を開けて、その穴を少しずつ大きくして、通常の排泄の仕方に近づけていくという方法である。これは、オムツをしたままなら排泄がしやすいという状況を活用したものである。エリクソンには、20~25cmの長さのパイプをペニスに装着しないと排尿できない男性の事例がある。エリクソンは彼をトランスに誘導し、30cmの竹筒を排尿時に用いるよう勧めて、「一日か二日したら、あるいは、一週間か二週間かしたら、竹はどのくらいの長さでなくちゃいけないのだろうかと思うかもしれません

んし、四分の一インチか、半インチか、あるいは丸々一インチか、切り落とすことはできるだろうかと思うかもしれません」などと暗示した。その男性は自分が竹を買ったことに気づいてびっくりし当惑したが、その後エリクソンの指示を思い出し、一週間後にはそのチューブを一インチに切り落とし、木曜日までに、さらに二インチ切り落とした。ひと月後には四分の一インチ幅の竹のリングが残っていたが、それはそのリングをもっている指を使えば十分こと足りることに気づき、竹のリングを捨てたという（Erickson, 2022）。排尿反応にチューブの条件刺激が必要だったわけだが、それを大幅に受容し（むしろ、長めのチューブで始めて）暫時チューブを切ることへと誘導したのである。この事例において、エリクソンが条件反射のことを考えていたのかはわからないが、佐久間の発想もこれと非常によく似ている。

(b) クライアントに用いる言葉の使用に関すること

エリクソンは「心理療法家は、博士論文レベルの言葉を使って患者を扱おうとしすぎる。つまり、自我、超自我、イド、あるいは意識、無意識などといったことを説明しようとしすぎるから、患者はコーンなのかポテトなのかハッシュなのか、一体何を話しているのかわからなくなってしまうのである。ゆえに、治療者は患者の言葉を使って話そうと努めなくてはならない」と述べ（Gordon & Mayers-Anderson, 2018）、援助される人の言葉を使って援助することを勧めている。佐久間の著書「広汎性発達障害児への応用行動分析（フリーオペラント法）」のまえがきには、「本書を一番読んでもらいたいのは若い勉強中の大学院生である（佐久間, 2013, p.12）」としながら、随所に「過保護にして赤ちゃん扱いで十分に甘やかす」「徹底的な甘やかし」などの一般的にもわかりやすい表現が用いられている。いずれも対人回避傾向

の強い子どもたちにとって人の関わりが喜びにつながり、コミュニケーションの動機づけを高めるための環境構築のためのものだが、時に誤解を生じやすい。わがままの弊害として生じた問題行動に対する対応も含めた総合的な支援法であるという点が抜けると、おそらく同業の行動療法家ですら、眉をひそめる可能性がある。それでもストレートでわかりやすく行動に直結しやすい表現のもつメリットの方を重視したのではないかと思われる。その一方で、自閉スペクトラム症の子どもたちに関わっていると、Kanner (1949, 1956) が指摘したように、知的水準の高い職業の保護者と関わることを一定割合は経験することになる。そのことが佐久間との話題になったとき、指導の原理を説明するには彼らの論理的思考力の高さを考慮して、自著論文を読んでもらうことにしていると述べていた。佐久間は英文献の翻訳や保護者向けのパンフレットも含めて、わかりやすく表現することに心を砕いていたが、相手の背景や理解度によっては専門的に記述された論文の方が理解されやすいということに気づいていたようである。目の前の相手によって対応を変える柔軟さがそこにある。

(c) 佐久間のデモンストレーション

筆者自身が佐久間に就いて修業をしていた時代のことである。担当していた子どもが金槌を使って、木板に釘を打ち付ける行為を繰り返していた。当時の筆者はその状況に付き添い、適当な声掛けをするぐらいで、なす術もなくただ見守るだけだった。同じ部屋の中で保護者の話を聞いていた佐久間は適当な頃合いにその子の横で同じように板に釘を打ちつけ始めた。もう少しのところで箱のようなものが完成できるという状況を設定し、最後の締めのところをその子にやってもらうようにして、箱が完成する状況を構成した。応用行動分析には逆行性連鎖化という技法がある。これは一連の行動をいくつかの要素に分

解しその各要素を漸次つなげるようにして指導していく技法（連鎖化）のうち一連の行動成分の最終目標から指導を始め順次その前の要素をつなげていき順序的に逆の方向から指導していく技法である（Schreibman, 1985）。例えば身辺自立への応用として自分でシャツを脱ぐことを指導する場合、大人がシャツの袖を腕から抜いて、そして頭まで引き上げてから、自分でするように促し、それができたらその次のステップとして首のところにあるシャツを脱ぐというように段階づけていくという技法である（Albert & Troutman, 1999）。最後の部分を子どもに任せて完成の喜びを味合わせるという意図がある。たまたまその子が興味を持った釘打ちの行動を活用して「（ただ釘を打ち付けるだけでなく）何かを作って完成させる」という行動と繋げたのである。

(4) 合わせ (pacing) とずらし (leading) の視点からの整理

ユーティライゼーションは、合わせ (pacing) とずらし (leading) からなる一連のプロセスとして整理することができる（Bandler & Grinder, 1975；谷・津川, 2017；津川, 2005；津川・谷・寺田, 2011）。合わせとは、姿勢、動作、呼吸、声の質やトーン、話す内容、価値観などを対象者に合わせることであり、ずらしとは、治療的な方向づけを示している（津川, 2005, 2012）。例えば前述した夜尿症の少年ジェリーの事例のように金切り声に対して同じように金切り声をあげることで合わせそのやりとりを順番に交代していき椅子に座って見せることで着席へと誘導し治療につながるように導くことがずらしということになる。どのようにずらすかは各々の事例の状況によって様々に変わる。

この視点からこれまで述べてきた佐久間徹の臨床実践を整理したものが表1である。その実践の多くは、合わせとずらしの一連の過

程として分析可能であり、援助パターンにおいても彼がユーティライゼーションに開かれていたことを裏づけるものと考えられる。

表1 合わせ (pacing) とずらし (leading) の視点から見た佐久間徹の臨床実践

意図	合わせ (pacing)	ずらし (leading)
Mちゃんの発声を高め、模倣を引き出す	Mちゃんの面白がる気持ちに合わせるようにして跳ぶ	Mちゃんの声が出るのを待って、その都度ピョンと跳ぶ Tが声を出して、その後にMちゃんがそれに合わせて声を出したら跳ぶ
「喃語レベルでの大きな声を出す」ことによる音声コントロールの改善 (ワン・サウンド・センテンスに焦点をあてた有意味化)	自発的な発声に応答する (逆模倣)	比較的大きな声を出したときは大きさに応答し、そうでない時はごく普通に応答する 有意味化した単音にはその文脈にあった対応をする
自分の思い通りにしたいがために生じる他害行為のコントロール	他害行為の強度を見極めながら、子どもの思い通りにさせる	強度が強い時は子どもの思い通りにするタイミングを遅らせ、弱い時に即座に認めてあげる
人への関わりとして生じている他害行為のコントロール	他害行為の強度を見極めながら、反応する	他害行為の強度が強い時はひかえめに反応し、弱い時におおげさに反応する その後は人への働きかけのモデルを提示して、適切な行動の習得を進める
パニックと呼ばれる泣き叫びのコントロール	興奮の波パターンの山と谷を見極めながら、様子を見守る	ピーク (山) を過ぎて、下降期にさしかかったら慰めの介入や大幅に妥協して可能な限り要求に応じてやる
紙オムツの中におしっこ、大便の習慣ができてしまい、修正が難しい場合に便器での排泄を誘導する	紙オムツのまま便器に座り、おしっこ、うんちを紙おむつの中でする	オムツに小さな穴を開けて、出したら便器へ落ちる 暫時、穴を大きくしていく
援助の方法について説明と同意を得る	クライアントの知的水準によって、わかりやすい表現のパンフレット用いるか、あるいは自著論文を提供する	援助の方法の理解を得て、対応の協力を求める
木板にくぎを打ち付けることに熱中している子どもに何が作れることを教える	子どもと一緒にあって、木板にくぎを打ち付け、もう少しで箱が完成しそうなのを作る	子どもに完成を促す

3 佐久間とエリクソンの類似点

(1) ユーティライゼーションに開かれていること

ここまで例証してきたように佐久間もまたユーティライゼーションに開かれているということが第一の類似点である。

筆者はエリクソンに関連したテーマを扱った研究論文（石原，2020）を佐久間に読んでもらい、コメントをもらう機会を得たことがあった。その際、佐久間は直接的にはユーティライゼーションについては触れず、エリクソンが「無理論アプローチ」（Zeig & Munion, 1999）に立っているということと自らの障害を活用しているということを類似点として挙げた⁽⁴⁾。佐久間が特筆しなかったのは、ユーティライゼーションが彼にとって当たり前のことだったからなのかもしれない。前出の論文と一緒に送った精神科医療機関への受診支援に関する論文（石原，2019）に対して「本論文でも少しばかり触れていましたが、CL（支援対象者の意）の躊躇を解消し信頼関係の構築に、有効な手続きとして、私は、相手が困っていることで私が短期間に滞りなく解決できることを1つずつと解決するという手をよく使います。例えば、子どもの偏食とかおねしょとか乱暴行為など短期間に解決すれば厚い信頼関係がすぐに出来上がり、指示に従う関係が簡単に出来上がります」と述べている⁽⁵⁾。この手法はShort, Erickson, & Erickson-Klein（2005 浅田訳 2014）によって、「小さな問題の利用」として、ユーティライゼーションの一つと説明されている。すなわち、「たとえば、まず日常生活の課題を取り上げ、患者がその解決に成功する体験を通して、もっと複雑な別の問題を解決する力が自分にはあると気づけるようにすることができると」という考え方である。佐久間本人の直接的な言及は得られなかったが、これまでの説明もふまえて、彼がユーティライゼー

ションに開かれていたと考えられる。

(2) 「無理論」的であること

「無理論アプローチ」は、治療者が焦点を当てるべき患者の心の働きのさまざまな側面を狭く限定してしまい、変化を生み出す個別の方法にも制限を加えることがないように特定の理論に依拠しないという考え方である（Zeig & Munion, 1999）。応用行動分析に立脚する佐久間がエリクソンの「無理論アプローチ」と自らの実践を重ねて捉えたことには少し解説が必要かもしれない。応用行動分析では、古典的条件づけとオペラント条件づけを主要な原理として目の前の現象が分析されるが、いわゆる「心」に関する推論やイメージを構築せず、生体の外にある刺激とその刺激と相互作用する反応に焦点を当てるアプローチである。外的現象については理論化されるものの、心的モデルについて何ら前提をもたないという点において「無理論」的であると言える⁽⁶⁾。臨床的には、目の前の子どもやクライアントがどのような刺激との相互作用で生じてほしい反応（反応の形態や強度）が生じていないのか？あるいは生じないで欲しい反応（反応の形態や強度）が生じてしまっているのか？ということに焦点を当てて観察する姿勢である。多かれ少なかれどのような心理療法のオリエンテーションでもこのような観察の姿勢をもっているだろうが、応用行動分析はこの点において特に頑なであり、佐久間の臨床実践はそれを体現していたと筆者は感じている。子どもが水で遊びだすと自分のことが目に入らなくなると訴える保護者に対して彼は「子どもの気持ちは、理解できたら理解すべきでしょうが、無理すべきではない。自分の子どもであっても、自分自身ではないのです。それを無理に理解しようとすると、真実から遊離した作り話を作ってしまう。わからない時にはわからないとして、子どもの行動をじっくり観察するこ

とを繰り返すべきです。最後までわからないままのこともあります。観察を続けているとわかってくる場合もあります」と話し、水遊びに没頭する子どもをただ手伝ってあげるようにと優しく諭している（石原・佐久間, 2015）。佐久間の臨床上の姿勢を象徴する一場面だと思われる。従って、「無理論」的であるということが、エリクソンとの第二の類似点であると考えられる。

(3) 自らの障害を活用したこと

エリクソンには先天的な障害があり、いわゆる赤緑色盲で、音の高低がわからず、基本的なリズムの聞き分けができず、6歳までmと3の区別ができないなど読みの障害があったが（Zeig&Munion, 1999）、佐久間にも「紅緑色盲で右耳が難聴というハンディがあり、軽度の障害だが、自閉症を相手にする仕事の基礎」と述べ⁽⁷⁾、自らの障害が一般とは異なる特性をもつ人との関わりに役に立っていたと考えていたようである。共に障害をもちながら、それを各々の仕事上で活用してきたという点が第三の類似点である。

(4) アプローチのわかりにくさ

「ミルトン・エリクソン入門」の筆者であるビル・オハンロンは「ミルトン・エリクソンはわかりにくい人だった」とその日本語版の序の冒頭で述べている（O'Hanlon, 1987 森・菊地訳 1995）。そして、エリクソンには「魔法使い」（澤野, 2019）の異名すらある。そして、佐久間も「職人芸」とか「職人肌のかかわり」⁽⁸⁾とよく言われてきた。臨床スキルが優れていることと、一見したところなぜそうしたアプローチをしたのかがわかりにくいことがその要因ではないかと思われる。そのわかりにくさは、二人とも従来のやり方にこだわらずに、目の前の援助対象者を観察して、そこから得られたものを援助に活かしていくというユーティライゼーションに開かれ

ていたことによるものではないかと考えられる。つまり、目の前の援助対象者の状況によって援助の仕方が多種多様になり、その実践の理解に困難さが伴うからである。

4 まとめと今後の課題

小論において、ユーティライゼーションの視点から佐久間徹の心理臨床実践を整理した。フリーオペラント法、反応強度分化強化法およびその他のエピソードから佐久間の実践がユーティライゼーションに開かれたものであることが見てとれた。そして、その他にも「無理論」的であることや自らの障害を心理臨床実践に活かしていることがエリクソンとの類似点として挙げられた。その実践のわかりにくさはユーティライゼーションに開かれることによるものであると考えられた。

ユーティライゼーションを含むエリクソンのアプローチはオリエンテーションを越えた共通要因として検討することが可能であるかもしれない。そのような可能性がどこまで開かれているか今後検討していきたいと考えている。

(注)

- (1) 当時、梅花女子大学教授。本文では敬称を略し敬語も最小限に留めている。佐久間徹先生は、関西学院大学大学院文学研究科を満期退学後、梅花女子大学教授関西福祉科学大学大学院教授を歴任した。応用行動分析に立脚する臨床児童心理学者であり、後述するフリーオペラント法の創始者の一人である（佐久間, 2013）。
- (2) 原語のutilizationは「利用」と訳されることが多いが、日本語で「利用する」というと、望ましい意味ではない場合が多いので、あえてここでは原語のカタカナ表記を用いた。
- (3) 佐久間（1990）は、「人の応答が嫌悪性

を帯びる状況を可能な限り排除し、さらに、人の応答の強化機能を積極的に形成する試みを重ねる。いわば、選択という域を超えて強化子工作という積極策をとる」と説明している。

- (4) 私信2020年4月5日。
- (5) 同上。
- (6) 行動を分析する際の「刺激」「反応」あるいは「強化」などの概念化自体も抽象の一つであり厳密には理論化に含まれると考えられる。ただここでは多くの心理療法アプローチが心的モデルを採用していることから心的モデルを構築しないことをもって相対的に「無理論」的とした。
- (7) 注(4)に同じ。なぜか文が途切れて体言止めで終わっていた。
- (8) 園山 繁樹 (2023). 佐久間徹先生を偲んで 故佐久間徹追悼号 偲ぶ会有志メンバー作成

引用文献

- Albert, P. A., & Troutman, A. C. (1999). *Applied Behavior Analysis for Teachers* (5 Ed.). Prentice-Hall. (佐久間 徹・谷晋二・大野 裕史監訳 (2004). はじめての応用行動分析 (第2版). 二瓶社)
- Bandler, R. & Grinder, J. (1975). *Patterns of Milton H. Erickson, M. D. vol.1*. Meta Publications. (浅田 仁子訳 (2012). ミルトン・エリクソンの催眠テクニック：言語パターン篇 春秋社)
- Bijou, S. W., & Baer, D. M. (1978). *Behavior Analysis of Child Development*. Englewood Cliffs, Prentice-Hall.
- Erickson, M. H. (2022). Special Techniques of Brief Hypnotherapy, In E. L. Rossi, R. Erickson-Klein, & K. L. Rossi, (Eds.), *The Collected Works of Milton H. Erickson MD*. Vol.3, Digital Edition. (Original work published 1954, *Journal of Clinical and Experimental Hypnosis*, 2, pp.109-129. <https://doi.org/10.1080/00207145408409943>)
- Erickson, M. H., & Rossi, E. L. (1981). *Experiencing hypnosis*. New York: Irvington. (横井 勝美訳 (2017). ミルトン・エリクソンの催眠の経験 変性状態への治療的アプローチ 金剛出版)
- Gordon, D., & Mayers-Anderson, M. (2018). *Phoenix: Therapeutic patterns of Milton H. Erickson*. Independently published. (Original work published 1981, Meta Publications)
- 石原 幸子・佐久間 徹 (2015). 発達障害児の言語獲得 応用行動分析的支援 (フリーオペラント法) 二瓶社
- 石原 辰男 (2019). 妄想や幻覚などの症状がある人を受診に導く支援の質的分析—M-GTAによるモデル構成— 立命館大学心理・教育相談センター年報, 17, 3-13.
- 石原 辰男 (2020). ミルトン・エリクソンの心理療法と「利用」 立命館大学心理・教育相談センター年報, 18, 11-19.
- 石原 辰男 (2021). 臨床思想について：心理臨床の多様性を通底するものとして 立命館大学心理・教育相談センター年報, 19, 19-25.
- Kanner, L. (1949). Problems of nosology and psychodynamics of early infantile autism. *American Journal of Orthopsychiatry*, 19(3), 416-426. <https://doi.org/10.1111/j.1939-0025.1949.tb05441.x> (カナー, L. 十亀 史郎・斉藤 聡明・岩本 憲 (訳) (2001). 幼児自閉症の研究 黎明書房 pp.62-73)
- Kanner, L. (1956). Early infantile autism: 1943-1955. *American Journal of Orthopsychiatry*, 26, 55-65. (カナー, L. 十亀 史郎・斉藤 聡明・岩本 憲 (訳)

- (2001). 幼児自閉症の研究 黎明書房 pp.103-114)
- 久野 能弘・桑田 繁 (1988). フリー・オペラント技法による自閉症児の言語形成 (その2) 上里 一郎 (編) 心身障害児の行動療育 (pp.94-129) 同朋社
- Matlin, M. (1983). *Cognition*. Holt, Rinehart, and Winston.
- O'Hanlon, W. H. (1987). *Taproots: Principles of Milton Erickson's Therapy and Hypnosis*. W. W. Norton & Co. (森 俊夫・菊地 安希子 (訳) (1995). ミルトン・エリクソン入門 金剛出版)
- 大野 裕史・杉山 雅彦・谷 晋二・武藤 博文・中矢 邦彦・園山 繁樹・福井 文子 (1985). いわゆる「フリーオペラント」法の定式化：行動形成法の再検討. 心身障害学研究, 9(2), 91-103.
- Rosenzweig, S. (1936). Some implicit common factors in diverse methods of psychotherapy: "at last the Dodo said, 'Everybody has won, and all must have prizes.'" *American Journal of Orthopsychiatry*, 6, 412-415. <https://doi.org/10.1111/j.1939-0025.1936.tb05248.x>
- 佐久間 徹 (1988). フリー・オペラント技法による自閉症児の言語形成－構音困難を伴う自閉症児に対するワン・サウンド・センテンスの試み－ (その1) 上里 一郎 (編) 心身障害児の行動療育 (pp.62-93) 同朋社
- 佐久間 徹 (1990). フリーオペラント法の今後の問題 高木 俊一郎 (編) 行動療法ケース研究8 自閉症児の行動療法 (pp.132-142) 岩崎学術出版社
- 佐久間 徹 (2013). 広汎性発達障害児への応用行動分析 (フリーオペラント法) 二瓶社
- 澤野 雅樹 (2019). ミルトン・エリクソン 魔法使いの秘密の「ことば」 法政大学出版局
- 嶋崎 まゆみ (1990). 自閉症児のためのオペラント療法 人文論究, 40(2), 75-93.
- Schreibman, L. (1985). Backward Chaining. In A. S. Bellack & M. Hersen (Eds.), *Dictionary of Behavior Therapy Techniques* (pp.22) Pergamon Press Inc. (山上 敏子 (監訳) (1987). 行動療法事典 岩崎学術出版社)
- Short, D., Erickson, B. A., & Erickson-Klein, R. (2005). *Hope & Resiliency: Understanding the Psychotherapeutic Strategies of Milton H. Erickson, MD.*, Crown House Publishing. (浅田 仁子 (訳) (2014). ミルトン・エリクソン心理療法－<レジリエンス>を育てる－ 春秋社)
- 谷 英俊・津川 秀夫 (2017). ガラス性愛者への関わり：合わせとずらしの観点から ブリーフサイコセラピー研究, 26(1), 21-28.
- Tinbergen, E. A. & Tinbergen, N. (1972). *Early Childhood Autism: An Ethological Approach (Advances in Ethology Series. No.10)*. International Publications Service. (田口 恒夫 (訳編) (1976). 自閉症－文明社会への動物行動学的アプローチ－ 新書館)
- 津川 秀夫 (2005). 痛みへのアプローチ：ブリーフセラピー, 臨床心理学, 5(4), 491-496.
- 津川 秀夫 (2012). 臨床心理学キーワード (第67回) 観察／合わせとずらし／リソース 臨床心理学, 12(4), 596-598.
- 津川 秀夫・谷 英俊・寺田 和永 (2011). 「困難」事例への心理検査：合わせとずらしの観点から ブリーフサイコセラピー研究, 20(1), 6-14.
- 吉川 悟 (2020). ブリーフセラピーの歴史－背景としてのエリクソンと社会 日本ブリーフサイコセラピー学会 (編) ブリー

フセラピー入門 柔軟で効果的なアプローチに向けて (pp.22-30) 遠見書房

Zeig, J. K. & Munion, W. M. (1999). *Milton H. Erickson*. SAGE Publications. (中野善行・虫明 修 (訳) (2003). ミルトン・エリクソンその生涯と治療技法 金剛出版)